

第1分科会 研究発表資料

「青少年リーダーとしての素地を育む事業展開の在り方」

－「ひこさん『山伏塾』長期の体験活動におけるプログラムの工夫を通して－

福岡県立英彦山青年の家研修課
社会教育主事 吉本 克彦

I はじめに

福岡県においては、将来を担う青少年の健全育成を県政の重要課題として位置づけ、さまざまな施策を展開している。中でも、平成13年度から始まった「青少年アンビシャス運動」は、「豊かな心、幅広い視野、それぞれの志を持つたくましい青少年の育成」を目指し、今や県民運動として定着し、その成果も着実に現れてきている。

本事業はこの運動の一環のサマーキャンプ事業であり、小学5年生から中学3年生までの子どもを対象に、自然の中で長期の共同生活を行い、たくましく生きる力を育てていくものである。福岡県立英彦山青年の家では、日本三大修験道の地の一つである英彦山にちなみ、事業名を「ひこさん『山伏塾』」とし、青少年がリーダーとなって活躍するための素地づくりを主なねらいとして事業を実施した。

II 研究内容

1. 主題の意味

(1) 「青少年リーダー」とは

「青少年リーダー」とは、地域社会を構成する一員としての自覚と責任を持ち、地域社会の発展のために、さまざまな問題に対して他者を先導しながら主体的かつ積極的に取り組む青少年のことである。

そのような「青少年リーダー」は、未来への夢や目標を抱きつつ、自己や社会のさまざまな物事に興味・関心を持ち、知識・技能の獲得や課題の克服、目標の達成等に向かって積極的に取り組み、自己の可能性を進展させようとする意欲を持つとともに、他者との人間関係を自ら広く、深く築いていこうとする態度が十分に備わっている人材であると考えられる。

(2) 「青少年リーダーとしての素地を育む」とは

「青少年リーダーとしての素地を育む」とは、本研究で言う「青少年リーダー」になりうるために、根底として身につけておくべき力を育むということであり、何事に対しても自ら考え行動しようとする自主性や、互いの違いを知り、互いに尊重し合おうとする協調性を養うことである。

この2つは、他者とともに活動する中でこそ、相互に関係し合いながら高まっていくものであり、子どもの自尊感情や自己肯定感を生み出し、積極的な活動のための原動力となっていくと考える。

(3) 「長期の体験活動におけるプログラムの工夫」とは

「長期の体験活動におけるプログラムの工夫」とは、子どもが9泊10日の生活体験

及び自然体験活動を行うにあたり、ねらいとなる自主性や協調性を効果的に身につけることができるようなプログラム構成上の手だてである。

活動集団には成長段階があり、その形成過程については、まず始めに、さまざまな動機と目的を持って参加者が集まっている「メンバーの集合」があり、次にメンバー相互がそれぞれの意見を出し合い、なかなか調整がつかない「混乱期」をむかえる。その後、メンバーの中にまとまりと秩序ができてくる「規範期」が訪れる。最後には成熟した活動の段階となり、メンバー相互が責任と役割を自覚しながら、集団として創造的な活動を展開することができる「活動期」になっていく。そうした集団の安定化が進めば進むほど、個々の子どもの考えが表出し、互いに認め合いながら活発に活動していくことが期待できる。

したがって、プログラム構成上の手だてとは、集団形成のプロセスに応じてプログラム構成を行いながら、段階的に難易度が高まっていくように体験活動を仕組み、班員の社会化を促進するとともに、班での活動の達成感や満足感を味わえるようにすることである。またそれと同時に、自主性や協調性に関わる観点が意識できる活動ノートの活用やスタッフの個に応じた支援を行いながら、子どもが自己を客観的に見つめ、自らの価値観を高めていくことができるようにすることである。

2. 主題設定の理由

今日、青少年を取り巻く社会環境が大きく変化し、生活体験、社会体験、自然体験不足等の要因から、子どもの学ぶ意欲の低下や自己中心主義の広がりが見られる。

このような中、平成19年1月30日の中央教育審議会答申「次代を担う自立した青少年の育成」では、青少年が社会的存在として一定の役割を担おうという「自立への意欲」を持つために「すべての青少年の生活に体験を根付かせ、体験を通じた試行錯誤・切磋琢磨を見守り支えよう」という提言がなされ、その方策の1つとして、青少年教育施設等を中核として、教育効果の高い体験活動を計画的に提供することが挙げられている。

また福岡県の平成20年4月に策定された第3次福岡県青少年健全育成総合計画では、「21世紀を担う、たくましいアンビシャスな（志を持つ）青少年の育成」を基本理念とし、青少年の自立につながる活動機会の拡充に力を入れている。

福岡県立英彦山青年の家では、これまでに高校生を対象とした事業「高校生ボランティア研修」を行い、地域社会の一員としてボランティア活動に取り組もうとする高校生を育てる取り組みや成人を対象とした事業「青年リーダー・ボランティア研修」を行い、地域社会のリーダーとして活躍できる人材を育成する取り組みを実践してきた。

その中で思春期後期や青年期である高校生や成人が、さらに一層地域社会の一員としての自覚と責任を持ち、社会発展のために積極的に活躍していくためには、その前の発達段階の学童期から思春期前期の小学生から中学生の時期に様々な体験活動を豊富に体験し、自ら考え行動しようとする力や互いの違いを知り、互いに尊重し合う態度といった自立への基礎を十分に培っていくことが重要であると考えた。そこで、小学生から中学生を対象に、青少年が次代を担うリーダーとなりうるための素地となる自主性や協調性を育むための事業展開の在り方を究明していくことにした。

3. 研究の目標

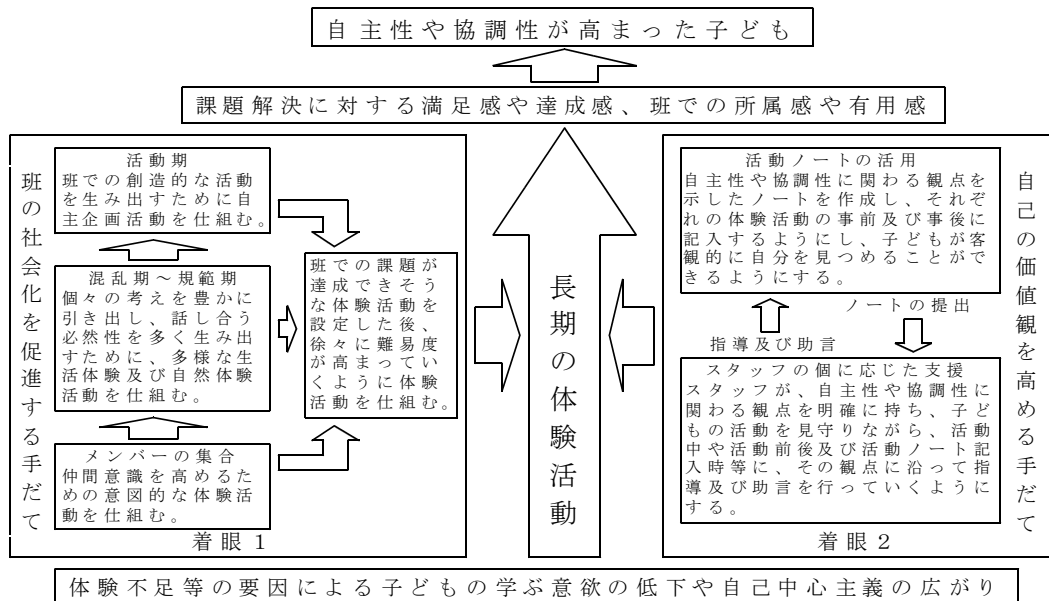
長期の体験活動において、子どもの自主性や協調性を育てていくための効果的な体験活動プログラムの在り方を究明する。

4. 研究の仮説

長期の生活体験及び自然体験活動において、以下の点から体験活動プログラムの工夫をすれば、子どもの自ら考え行動しようとする力や互いの違いを知り、互いに尊重し合う態度が育つであろう。

(着眼1) 班員の社会化を促進するとともに、班での活動の達成感や満足感を味わわせるために、集団形成のプロセスに応じたプログラム構成を行いながら、段階的に難易度が高まっていくように体験活動を仕組むようにする。

(着眼2) 子どもが自己を客観的に見つめ、自らの価値観を高めていくことができるように自主性や協調性に関わる観点が意識できる活動ノートの活用やスタッフの個に応じた支援を行うようにする。



5. 研究の実際

(1) 事業の概要

①事業名 ひこさん「山伏塾」 ～みんなでチャレンジ 海・川・山！～

②事業趣旨

海、川、山での長期間の共同生活体験や多様な自然体験活動を行うことを通して、子どもの自主性や協調性を養う。

③期日 平成20年 7月27日(日)～8月 5日(火) 9泊10日

④会場

- 福岡県立英彦山青年の家
- 大分県立香々地青少年の家
- 福岡県豊前市求菩提キャンプ場
- 財蔵坊(福岡県有形民俗文化財)

⑤対象及び定員

福岡県内の小学校5年生から中学校3年生までの児童生徒30名(実参加者28名)

⑥主なプログラム

	午前	午後			宿泊場所	
1日目 7月27日 (日)		開講式	仲間づくり1 (行動社会化経験プログラム)	ふりかえり	福岡県立英彦山青年の家	
2日目 7月28日 (月)	仲間づくり2 (行動社会化経験プログラム)	山伏ウォーク1(5km) (山伏の話1、英彦山周辺の散策)		ふりかえり	福岡県立英彦山青年の家	
3日目 7月29日 (火)	バス移動 (大分県豊後高田市へ移動)	わくわく海遊び (海水浴)	星座観察	ふりかえり	大分県立香々地青少年の家	
4日目 7月30日 (水)	どきどき海遊び (シュノーケリング、OPヨット、マテ貝とり、釣り)	野外調理1 (自主企画)		ふりかえり	大分県立香々地青少年の家	
5日目 7月31日 (木)	バス移動 (福岡県豊前市へ移動)	わくわく川遊び (川遊び、生き物探し)	野外調理2 (自主企画)	ふりかえり	求菩提キャンプ場	
6日目 8月1日 (金)	野外調理3	求菩提資料館 見学 (山伏の話2)	どきどき川遊び (沢登り、ヤマメとり)	野外調理4	ふりかえり	求菩提キャンプ場
7日目 8月2日 (土)	山伏ウォーク2(16.3km) (求菩提キャンプ場から英彦山青年の家へ徒歩で移動)			ふりかえり	福岡県立英彦山青年の家	
8日目 8月3日 (日)	伝統工芸体験 (英彦山がらがら鈴づくり)	財蔵坊宿泊準備 (山伏の話3)		ふりかえり	財蔵坊	
9日目 8月4日 (月)	山伏ウォーク2 (早朝英彦山登山)	お別れのつどいの準備	野外調理5	お別れのつどい	ふりかえり	福岡県立英彦山青年の家
10日目 8月5日 (火)	体験活動のまとめ (新聞づくりと発表準備)	体験報告会	閉講式			

(2) 事業の実際

①着眼1について

ア 「集団形成のプロセスに応じたプログラム構成」について

1日目と2日目は、「メンバーの集合」の時期ととらえ、人間関係づくりのきっかけとして、行動社会化経験プログラムを仕組んだ。(資料1~3) また、ふりかえりの活動では、お互いのことを知るためにキャンプ参加への動機や目的についての自分の思いを出し合った後、班のめあて決めや役割分担を行った。(資料4)

これにより、子どもたちは、次第にお互いのことを理解し始め、仲間意識が芽生えていった。また、班で課題解決へ向かう際は、自分の意見を出すことや相手の考えをよく聞くことが大切であること活動を通して実感することができていた。



(資料1)活動の様子



(資料2)活動の様子



(資料3)活動の様子



(資料4)ふりかえり活動

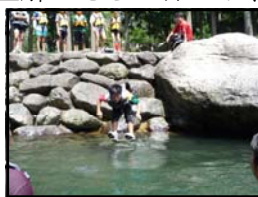
3日目から8日目にかけては、「混乱期」から「規範期」ととらえ、個々の考えが豊かになるようにし、調整がつかずに班でよりよい方向へ話し合わねばならないといった必然性を多く生み出すために、海、川、山での多様な自然体験活動(資料5~7)や班で事前に食事のメニューを決め、食材調達をしてから作る野外調理(資料8)等

の生活体験活動を取り入れた。

これにより、班によっては、海で遊ぶことに慣れている子どもが、無理にみんなを先導して活動したり、川での活動で遊び方を話し合っていたのにもかかわらず、きれいな川を見た瞬間、班員それぞれが思い思いに活動し、水を苦手とする子どもが端の方で座っていたり、野外調理のメニュー決めの際に多くの意見が出てまとまらなかったりする面がみられた。そこで、「班のだれもが納得できる活動をするために、自分の考えをしっかりと述べることや友だちの思いをしっかりと聞くこと」の大切さを再認識させ、班の話し合いを行うようにした。そうすることで、次第に班の中で意識をとまなう約束事ができていった。また、多様な体験活動により、子どものいろいろな側面が表出し、お互いの理解がさらに深まり、まとまりのある集団になっていった。



(資料5)海での活動



(資料6)川での活動



(資料7)山での活動



(資料8)野外調理

9日目から10日目は、「活動期」ととらえ、班での創造的な活動を生み出すために、お別れのつどいの内容を企画し実践したり（資料9,10）、10日間の体験活動のまとめを行い、体験報告会を実施したりする活動を設定した。（資料11,12）

これにより、子どもたちは、班員それぞれの持ち味を生かした役割分担をしながら、取り組みを進めていき、自分の役割に対して自信を持っていきいきと活動している姿がみられるようになった。特に班で体験のまとめをしている過程を観察すると、子どもがまとめ方や発表の仕方に関する意見を多様に出しているだけでなく、相手の考えを認め受容している姿勢や友だち同士の考えが分かれた際に、間に入りお互いの考えを認めながら、調整をしている様子もみられるようになった。



(資料9) つどいの企画



(資料10)お別れのつどい



(資料11)体験のまとめ



(資料12)体験報告会

イ 「段階的に難易度が高まっていくように体験活動を仕組むこと」について

「仲間づくり1」と「仲間づくり2」や「わくわく海遊び」と「どきどき海遊び」といったように、全体にわたって、同じ種類の活動を複数回、プログラムの中に仕組んでいった。そして、最初に「まずやってみる」ことを中心に活動し、次にその経験をいかして難易度を高めた活動を行い、課題解決を図っていく中で、班での活動の達成感や満足感を十分に味わえるようにした。

【具体例「山伏ウォーク」について】

2日目の「山伏ウォーク1」では、実際に修行をする行者が通っていた道を歩きながら、子どもが「山伏塾」の意味を再確認するとともに、5 kmを歩くことに対する自分自身や班の友だちの実態を把握することをねらいとして実施した。（資料13~16）

これにより、子どもたちは、「自分が思っていたよりもきつかった。」や「班の仲

間と歩いて、みんなのペースが違いすぐにばらばらになった。」等の気づきが生まれ、自分が認識していたことと実際との違いや自分と他の友だちとの体力面や精神面での違いが意識できたようである。



(資料13) 山道での様子1 (資料14)山道での様子2 (資料15)奉幣殿での様子 (資料16)参道での様子

7日目の「山伏ウォーク2」では、福岡県の豊前市求菩提キャンプ場から福岡県立英彦山青年の家までの尾根づたいとなる16.3kmを班で協力しながら歩き通す活動である。(資料17~20) 前日に「山伏ウォーク1」の経験をもとに、道のりや道の状況などのイメージを持つようにした後、班のみんなが達成できるように一人一人のがんばることや気をつけるべき点を班で話し合い実施に臨んだ。

これにより、子どもからは、「峠までは山伏ウォーク1で言えばここからどれくらいあるのですか。」や「この道は、あの時の道と似ているから足下にみんな気をつけよう。」等といった声が聞かれ、前回の体験を活かして取り組もうとしている姿がみられた。また、班の中では、友だち同士で「あともう少しだからがんばろう。」と励まし合う姿や「友だちもがんばっているのだから自分もがんばろう。」と互いに切磋琢磨している様子もうかがえた。最終的には長時間になったものの全員が歩き通し、このことが自分や班の中での確かな自信となっていくた。



(資料17)山道での様子1 (資料18)山道での様子2 (資料19)山道での様子3 (資料20)歩く様子4

9日目の「山伏ウォーク3」(資料21~24)では、福岡県有形民俗文化財である山伏の宿坊跡の財蔵坊から、午前3時に起床して英彦山の頂上を目指すといった早朝登山の活動を設定した。事前に登山ルートの概況を伝えた後、「山伏ウォーク2」の経験を想起させ、班のみんなが登頂を果たし無事に下山するために一人一人ががんばることや気をつけることを話し合って登山を行った。

これにより、「山伏ウォーク2」で登りを苦手としていた班の友だちに対して、同じ班の子どもが「大丈夫、少しお茶を飲んでみてはどう。」と声をかけたり、「自分は16.3km歩けたから、あきらめないぞ。」と自ら努力しようとしていたりしている子どもの姿がみられた。そして全員が頂上に着くことができ、班のみんなで歓声をあげ、喜びを分かち合っていた。



(資料21) 登山の様子1 (資料22)登山の様子2 (資料23)登山の様子3 (資料24)山頂での様子

②着眼2について

ア 「活動ノート」について

毎日のふりかえり活動の際に活動ノートを準備し、子どもが自分の活動に対する考えや思いを記録できるようにした。活動ノートにはそれぞれの活動内容に対して、事前に、約束や遊び方、準備、時間、健康安全面、取り組む気持ち等について自分が考え実践してみようということや友だちとよりよく関わっていくために自分が努力しようと思っていることを記録し、班の中で共通理解を図り、活動後には、それが実際どうであったのか記述して、班の話し合いを行うようにした。(資料 25,26)

最初は書くことに慣れずとまどっている姿がみられたが、徐々に記録することが定着し、子どもは、自分の活動に対して、自分で考えて活動することや友だちと助け合うといった観点で自己を客観的に見つめることができるようになってきた。



(資料 25) 記録の様子

4日 7月30日(水)					5日 7月31日(木)				
今日のふりかえり	とても	まあまあ	あまり	ぜんぜん	わくわく川遊びについて				
今日の活動は楽しかったですか。	○	◎	◎	◎	○こんなふうに自分で考えて活動したよ。				
自分で考えて活動できましたか。	◎	◎	◎	◎	ちょうしにのらなくて川で遊んだ。				
友だちと助け合って活動できましたか。	◎	◎	◎	◎	岩のうらに魚がいると考えた。もうと				
					小さな魚がいっぱいいた。				
1日ふりかえり、感じたこと					○こんなふうに友だちと助け合って活動したよ。				
海でシーリングをして魚などがたくさん見れたのがうれしかった。あと野外調理でほかの人ばかりにきかせてしまったので次はがんばろうと思った。					パティといっしょにそうたんしなから遊んだり、休んでいる水分ほきょうをした。こけがあってすべることを教えてあげた。				
明日はこうしよう					野外調理2について				
わくわく川遊びについて					○こんなふうに自分で考えて活動したよ。				
○こんなふうに活動しよう。					野外調理で血を洗ったり血をふいたりするのをやりとげた。火おこしは手を小さくしたけど少しぬれていたのがなかなかかまなかった。うきはがんばろうと思う。				
おぼれないようにふさげない。					○こんなふうに友だちと助け合って活動したよ。				
海でおぼえたシーリングで魚を釣たい。					あとかたづけで友だちのこけたなべがおちなからたのでいっしょにごしごしこすって、たかたかにした。				
○こんなふうに活動しよう。					パティとはくれないようにする。				
あぶないところがあれば教えてあげる。					○こんなふうに友だちと助け合って活動したよ。				
野外調理2について					あとかたづけで友だちのこけたなべがおちなからたのでいっしょにごしごしこすって、たかたかにした。				
自分がまかされた仕事をさいごまでやる。									
火が早くつくようにもともを小さくする。									
○こんなふうに活動しよう。									
自分の仕事が終わったら友だちを手づかす。									

(資料 26) 活動ノートへの記録例

イ 「スタッフの個に応じた支援」について

班毎に、児童生徒支援スタッフを1～2名配置し、班の子どもの支援にあたった。このスタッフは、生活面や保健安全面における基本的な事項を指導するとともに、子どもの様子を活動全般にわたって観察しながら、自主性や協調性が感じられる会話や行動を随時取り上げて、その子どもや班全体へ返していくように心がけた。特にふりかえり活動の際は、活動ノートに書いた子どもの思いや考えを取り上げ、班全体で共有するように支援していった。(資料 27,28) また、毎日スタッフミーティングを開催し、子どもの実態や子どもへの支援策についての交流を行い、班の子どもの指導にいかすようにした。



(資料 27) 班の交流

これにより、子どもは、自分の言動のよさに気づいたり、友だちのよさを認め、同じような行動を起こしたりと、それぞれの価値観が高まっていった。しかし、支援の効果をさらに高めていくためには、スタッフ自身が、より一層ねらいに対する観点を明確に持ち、きめ細かに子どものよさを見取っていく必要があることが課題となった。

7日 8月2日(土)	
山伏ウォーク2について	
○こんなふうに自分で考えて活動したよ。	山伏ウォーク2の時は、心のなごみはない
	よむいよむいという、ゆめをたてまじい
	しかし、と申「よわね」をはいてしま
	私はとてもショックでした。
	今度の登山は「よわね」をはかたにいよう
	がんばりたいです。
	よわねをはいても最後まで歩き通したね。
	いっしょけんめい歩くすがた、かがやいて
	いましたよ。
○こんなふうに友だちと助け合って活動したよ。	またかい、はけ「まし合、て
	さっしんは、声かけてして、
	目かけ合うことか「出たことか」
	とてもよかったです。
	たくさん声かけていたね!
	つかれた時こそ、友だちの声かけが
	元氣のもとになるね。
	私もパワーをもらたよ。

(資料 28) 子どもの記録への支援例

(3) 子どもの変容

①調査の方法

子どもたちの変容を評価するために、「事業効果測定のための調査票とその利用法（独立行政法人国立オリンピック記念青少年総合センター平成13年3月発行）」の「少年版野外体験事業用調査票」を採用し、事前、事後直後、1ヶ月後の計3回、同一内容の項目について調査した。

分析については、各質問項目で子どもが「きわめてあてはまる」「かなりあてはまる」「わりとあてはまる」「少しあてはまる」「あてはまらない」の5段階で自己評価した得点を4～0点とし、項目毎に各回の平均値を比較（対応のあるt検定）し、効果の測定を行った。ただし、今回の事業では、自主性や協調性を主なねらいとしており、自主性では「自己判断力」や「自己成長性」、協調性では「対人関係スキル」といった関連の深い因子について結果をまとめた。また、青少年リーダー養成の観点から「リーダーシップ」の因子についても分析し、結果をまとめた。

②調査の結果と考察

ア 自主性について

「自己判断力」についての分析結果

(4点満点)

項目	N = 28							
	事前 平均値 (標準偏差)	事後 平均値 (標準偏差)	1ヶ月後 平均値 (標準偏差)	事後-事前 平均値 増加分	t値	1ヶ月後-事前 平均値 増加分	t値	
決められた時間に遅刻しないで行くことができる。	2.21 (0.99)	2.96 (0.92)	3.04 (0.84)	0.75 (※1)	3.95*	0.82 (※1)	3.57*	
朝、人に起こされなくても、自分で起きることができる。	2.14 (1.24)	2.93 (0.98)	2.82 (1.09)	0.79 (※1)	2.87*	0.68 (※1)	2.69*	
脱いだ服や持ち物はきちんと整理ができる。	2.54 (1.20)	3.00 (0.98)	2.74 (1.10)	—	n.s.	—	n.s.	
必要な時に、ありがとう、ごめんなさいが言える。	2.39 (1.10)	3.29 (0.81)	3.25 (0.65)	0.89 (※2)	4.75*	0.86 (※2)	4.34*	
暑い時や寒い時に自分で衣服を調整することができる。	3.04 (0.96)	3.46 (0.84)	3.32 (0.94)	0.43	3.29*	—	n.s.	
困っている友だちを助けてあげることができる。	2.39 (0.96)	3.21 (0.96)	3.11 (0.69)	0.82 (※2)	4.12*	0.71 (※2)	3.73*	
出かけるときには、何が必要なのか自分で判断し必要なものを持っていくことができる。	2.64 (1.22)	3.21 (0.92)	3.29 (0.90)	0.57 (※1)	2.83*	0.64 (※1)	3.32*	

*p<.05

自己判断力では、「決められた時間に遅刻しないで行くことができる。」や「朝、人に起こされなくても、自分で起きることができる。」「出かけるときには、何が必要なのか自分で判断し必要なものを持っていくことができる。」という項目で、事後に増加が見られ、1ヶ月後においても持続している。(※1) これは、10日間のキャンプで「子ども自身に任せる」といったスタッフの見守る支援とともに、子ども自身が必ず守らないと十分な活動が行えないということを実体験した後、活動ノートの活用等で意識付けを図っていった結果、次第に定着が図れてきたと考えられる。また、「必要な時に、ありがとう、ごめんなさいが言える。」と「困っている友だちを助けてあげることができる。」という項目においても、事後に増加が見られ、1ヶ月後においても持続している。(※2) これは、班員の社会化を促進するようなプログラム

展開により、お互いの理解が一層深まっていき、子どもたちの中で「持ちつ持たれつ」の関係が構築されていったことが要因として考えられる。

「自己成長性」についての分析結果

(4点満点)

項 目	N = 28						
	事前 平均値 (標準偏差)	事後 平均値 (標準偏差)	1ヶ月後 平均値 (標準偏差)	事後-事前 平均値 増加分	t 値	1ヶ月後-事前 平均値 増加分	t 値
歩いている途中で疲れても、もんくを言わないで歩き通すことができる。	2.07 (0.98)	2.93 (1.05)	2.89 (0.92)	0.86 (※3)	3.66*	0.82 (※3)	3.99*
友だちよりうまくできないことがあっても、いやになったりせず、がんばり通すことができる。	2.57 (1.07)	3.04 (1.04)	2.79 (0.99)	0.46	3.10*	—	n.s.
工作している途中で、失敗した部分があっても自分で工夫して作品を完成させることができる。	2.79 (1.20)	3.14 (1.04)	2.82 (0.98)	0.36	2.59*	—	n.s.
みんなのできないようなむずかしいことに挑戦する方だ。	2.57 (1.26)	2.82 (1.09)	2.71 (1.12)	—	n.s.	—	n.s.
できないことがあるとできるようになるまで努力しつづける方だ。	2.18 (1.06)	3.00 (0.86)	2.79 (0.96)	0.82 (※3)	4.80*	0.61 (※3)	2.76*

*p<.05

自己成長性では、「歩いている途中で疲れても、もんくを言わないで歩き通すことができる。」と「できないことがあるとできるようになるまで努力しつづける方だ。」という項目において、事後に増加が見られ、1ヶ月後においても持続している。(※3) これは、「山伏ウォーク1, 2, 3」の例でみられるように、段階的に難易度が高まっていくように体験活動を仕組むことにより、子どもが自分で最後までやり遂げたという達成感を味わい、やればできるといった大きな自信を持つことができたからだと考えられる。

イ 協調性について

「対人関係スキル」についての分析結果

(4点満点)

項 目	N = 28						
	事前 平均値 (標準偏差)	事後 平均値 (標準偏差)	1ヶ月後 平均値 (標準偏差)	事後-事前 平均値 増加分	t 値	1ヶ月後-事前 平均値 増加分	t 値
だれとでも気軽に話ができる。	2.64 (1.13)	3.21 (0.96)	3.18 (0.94)	0.57 (※4)	2.92*	0.54 (※4)	3.81*
新しい友達を簡単に作れる。	2.32 (1.33)	3.25 (0.93)	3.04 (1.00)	0.93 (※4)	4.67*	0.71 (※4)	3.20*
遊んでいる仲間にあとから加わることができる。	2.57 (1.17)	3.32 (0.82)	3.07 (1.02)	0.75 (※4)	4.28*	0.50 (※4)	2.55*

*p<.05

対人関係スキルでは、「だれとでも気軽に話ができる。」「新しい友達を簡単に作れる。」「遊んでいる仲間にあとから加わることができる。」という項目において、事後に増加が見られ、1ヶ月後においても持続がみられる。(※4) これは、班員の社会化を促進するようなプログラム展開と段階的に難易度が高まっていくように体験活動を仕組むことにより、班のみんなで課題を解決していくことができたという達成感や満足感を味わい、友だちとともに活動する楽しさを十分に実感することができたからだと考えられる。また、児童生徒支援スタッフが、他者とのよりよい関わり方についての視点を持ちながら、子どものよさを取り上げ、班に広げていったことも要因として考えられる。

「リーダーシップ」についての分析結果

(4点満点)

項目	N = 28		事前	事後	1ヶ月後	事後-事前	1ヶ月後-事前
	平均値 (標準偏差)	平均値 (標準偏差)	平均値 (標準偏差)	平均値 (標準偏差)	平均値 (標準偏差)	t 値 増加分	t 値 増加分
班長やリーダーを積極的にひきうけることができる。	1.96 (1.50)	2.54 (1.04)	2.50 (1.14)	0.57 (※ 5)	2.83*	0.54 (※ 5)	2.25*
みんなの意見をまとめることが得意である。	1.68 (1.44)	2.32 (1.06)	2.21 (1.07)	0.71	2.27*	—	n.s.
何かやろうとすると、リーダーになってやる方だ。	1.79 (1.66)	2.32 (1.06)	2.25 (1.04)	—	n.s.	—	n.s.
大人や年上の人に自分の考えを言える。	2.32 (1.39)	3.14 (0.93)	3.11 (0.79)	0.82 (※ 6)	3.19*	0.79 (※ 6)	3.47*

*p<.05

リーダーシップについては、「班長やリーダーを積極的にひきうけることができる。」という項目において、事後に増加が見られ、1ヶ月後においても持続がみられる。(※5) これは、10日間キャンプで、自分がさまざまなことに挑戦し、やり遂げた自信から効果として現れたと考えられる。また、「大人や年上の人に自分の考えを言える。」という項目においても、事後に増加が見られ、1ヶ月後の持続がみられる。(※6) これは、異学年及び児童生徒支援スタッフとの長期集団生活の中での相互の関わり合いを通して培われてきたのではないかと考えられる。

Ⅲ 成果と課題

1. 取組の成果

- (1) 集団形成のプロセスに応じたプログラム構成を行い、班員の社会化を促進するとともに、段階的に難易度が高まっていくように体験活動を仕組み、班での活動の達成感や満足感を味わわせていくことは、子どもの積極的、自主的な行動や子ども同士の認め合いや助け合いを生み出す上で有効であった。
- (2) 事業のねらいにそって、子どもが自己を客観的に見つめることができるようなノートを取り入れたり、指導者が子どもの言動のよさを見取り、子ども自身に返しながら価値付けを図っていったりすることは、子どもが自分の言動に対するよさを実感することができ、自ら考え行動していく力や友だちを認め尊重していく態度を高めていく上で有効であった。

2. 今後の課題

- (1) 子どもの活動意欲をさらに高め、能動的な活動としていくために、事業前の実態把握をきめ細かに行い、プログラムに反映していくことやそれぞれの体験活動に対する動機付けを十分に行っていく必要がある。
- (2) 子どもがねらいを十分に意識ながら活動に取り組むことができるように、ねらいに対する観点を明確かつ詳細にしておく必要がある。また、子どもを支援するスタッフの指導力の向上を図っていく必要がある。